

『 On-line みんなで法華經を学ぼう! 』 vol.25

Apr.2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(“法華經觀”を見つける旅に出よう!)

『妙法蓮華經 常不輕菩薩品第二十』 (本門・流通分)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も

隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○ 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

※ 表記 例: (P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

<隨喜功德品の復習>

・信仰は掛け算 (P356・1行/P267・終4行)

信仰は、よく掛け算にたとえられます。すなわち「信仰の対象×信仰の心=信仰の結果」です。その数式は $100 \times 1 = 100$ という大きな結果になるのです。

・五十展転 (P365・1行/P274・終2行)

『第五十人の展轉して法華經を聞いて隨喜せん功德、尚お無量無邊阿僧祇なり』 (二九八頁 終三行)

・手どり・導きの大切さ

大切なことは「導きの後に手どりがある」のではなく、「手どりの先に導きがある」。この捉え方が大切です。手どられた人が次の人を導いて行く。これこそが「五十展転」の生きた姿です。

・須臾聞法 (しゅゆもんぼう) (P383・終5行/P289・6行)

『若しは坐し若しは立ち須臾も聽受せん。～及び天宮に乗ぜん』 (二九九頁 一行)

ほんの短い間、ただ「教えを聞いた」というだけで、天上界に生まれるというのです。「法を聞く」ことが、その人の人生に大きな転機を与えることになるのです。

・素直で純真な心こそ (P400・終3行/P304・終3行)

『更に人の來ることあらんに勸めて坐して聽かしめ、若しは座を分つて坐せしめん〜共に往いて聽くべしと』 (二九九頁 四行)

教えを聞いて心から感激を覚える「素直な心」、また、「感激」を覚えたら、それを人に分け与えずにはおられなくなるという「純真な気持ち」…、これが信仰者にとって、最も大切であることを、この品で強く教えられているわけでありませう。

<法師功德品の復習>

・法師功德品の趣旨 (P403・1行/P307・1行)

前の『隨喜功德品』は、初心者が得る功德について説かれていましたが、この品では、もう一歩進んだ段階の信仰者、すなわち「法師」の功德について説かれています。

・眼の功德 (P416・1行/P317・3行)

『功德ある殊勝の眼を得ん 是を以て莊嚴するが故に 其の目甚だ清淨ならん〜未だ天眼を得ずと雖も 肉眼の力是の如くならん』 (三〇四頁 一行)

⇒ 心が澄み切って、「我」がないために、「先入観や主観」によって物事の『真相』を歪(ゆが)めて見ることがないのです。

・耳の功德 (P424・8行/P324・3行)

信仰の進んだ人は、あらゆる人の声(苦しみ、悲しみ、怒り、喜び) すべてを(正しく)聞きとることができる…というのです。

『要を以て之を言わば三千大千世界の中の一切内外の所有る諸の聲、未だ天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常の耳を以て皆悉く聞き知らん』 (三〇五頁二行)

・鼻の功德 (P435・6行/P334・5行)

やはりものの本質がハッキリつかめるようになるという意味にほかなりません。そればかりではありません。その物事が「尊いか、尊くないか」「正しいか、正しくないか」「安全か、危険か」を嗅ぎ分ける・知り分けることができるのです。

『及び聲聞の香・辟支佛の香・菩薩の香・諸佛の身の香、亦皆遙かに聞いて其の所在を知らん』 (三〇八頁 八行)

『若し懷妊せる者あつて 未だ其の男女 無根及び非人を辯えざらん 香を聞いて悉く能く知らん』 (三〇〇頁 二行)

・舌の功德 (P457・終3行/P355・4行)

舌の功德は、二つに分かれていて、第一は食物の味がよくなること、第二は自分の説くことがよく人を動かすようになるということです。

『又諸の聲聞・辟支佛・菩薩・諸佛常に樂つて之を見たまわん〜諸佛皆其の處に向つて法を説きたまわん』 (三一三頁 二行)

諸々の声聞・緣覺・菩薩、そして諸仏が、その人に会うことを常に願っている…。

仏さまの方から「会いたい」と欲せられるのですから、どんなに価値ある人間であるかが解ります。

・身の功德 (P469・終4行/P365・終5行)

『其の身淨きが故に、～下阿鼻地獄に至り上有頂に至る所有及び衆生、悉く中に於て現ぜん。

若しは聲聞・辟支佛・菩薩・諸佛の説法する、皆身中に於て其の色像を現ぜん』(三一四頁 七行)

「**五種法師**」をよく行ずる者は、全てのものの実相をその身に反映するような、「**清浄な人間**」になるというのです。つまり、その人には「**我**」というものがありませんから、この世の**すべてのものの姿が、歪みもなく、曇りもなく、ありのままに映る**というわけです。(P472・1行/P367・終行)

・**意の功德**——ほんとうの意味において深い信仰に達している人は、こういう実生活上のことからについて説いても、それが**おのずから仏さまの説かれた正法に一致してくる**というのです。

(P475・終2行/P371・4行)

『其の義趣に随って、皆實相と相違背せじ』 (三一六頁 三行)

『若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん』 (三一六頁 四行)

『而も其の意根の清浄なること此の如くならん。是の人の思惟し籌量し

言説する所あらんは、皆是れ佛法にして眞實ならざることなく、亦是れ先佛の經の中の所説ならん』 (三一六頁 六行)

『是の人は意清浄に 明利にして穢濁なく 此の妙なる意根を以て上中下の法を知り 乃至一偈を聞くに 無量の義を通達せん』 (三一六頁 終三行)

『無量の義を思惟し 説法すること亦無量にして 終始忘れ錯らじ』 (三一七頁 三行)

『法華經を持つ者は 意根淨きこと斯くの若くならん』 (三一七頁 七行)



<常不輕菩薩品のあらすじ>

【仏の『無量寿』を知って実践する功德と、法華經行者を罵る罪】——

【三一八頁 一行】 仏滅後に仏の無量寿を知って『**五種法師**』を行ずる者は、「眼・耳・鼻・口・身・意」の六根が清まることを**釈尊**が説かれ、**得大勢(とくだいせい)菩薩**に語られました。

「今こそ皆さんはしっかりと知るのです。／(『法華經を持(たも)たん者を、若し悪口(あくく)・罵詈(めり)・誹謗(ひぼう)することあらば、大(おお)いなる罪報を獲(え)んこと前(まへ)に説く所の如し』) もし、法華經を信受する男女の出家・在家の**修行者たち**に対して**悪口を言ったり、罵(のの)しつたり、誹謗(ひぼう)する**ような人は、その**大罪(たいざい)の報い**を受けなければなりません。それは『**警諭品**』で『その人は阿鼻地獄(あびじごく)へ落ちるだろう』と示した『**十四謗法(じゅうし ほうぼう)の罪**』(『一一〇頁 終行~』)のとおりです。それとは反対に、法華經を行ずるその人は、今、『**法師功德品**』(『三一八頁 三行』)『其(そ)の所得の功德は、向(まへ)に説く所の如く眼・耳・鼻・舌・身・意・清浄(しょうじょう)ならん』)で説いた通り、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根がこの上なく清まり、甚大な功德を得ることができます」

【過去世の威音王(いおんのう)如来の時代の話】——

【三―八頁 四行】「得大勢よ。無量無辺不可思議阿僧祇劫(あそうぎこう)という計り知れない遠い過去。威音王(いおんのう)如来という仏がおられました。【(偈)三二三頁 六行】『神智無量にして一切を將導(しょうどう)したもう』この仏は非常に優れた智慧をお持ちになり、この世の全ての実相を見通す智慧を具えており、一切の者を正しく導かれていました。そして天上界の住人も、人間界の住人も、さらには人間以外の鬼神たちも、その仏に対して感謝と讃歎の供養を捧げるのでした。その仏がおられた時代は離衰(りすい)、国は大成(だいじょう)と言い、仏は天人や人間、阿修羅(あしゅら)など鬼神たちに法を説かれていました。そして、《声聞(しょうもん)》の悟りを求める者に対しては『四諦の法門』を説いて生老病死の人生苦から解き放たせ、《辟支仏(びやくしぶつ・縁覺)》の悟りを求める者に対しては『十二因縁の法門』を説いて人生苦の原因と成り立ちについて明かされました。そして《菩薩》の悟りを求める者に対しては最高の悟りを得る道である『六波羅蜜の法門』を説き、仏の智慧をきわめることを示されたのでした」

【三―九頁 一行】「得大勢よ。この威音王(いおんのう)仏の寿命は、四十万億那由他恒河沙劫(なゆたごうがしゃこう)という計り知れない期間です。そして教えが正しく行われている『正法(しょうぼう)』の期間は、この地球を粉末にした数の劫(こう)に及ぶ年数です。また教えが形の上だけでも伝えられる『像法(そうぼう)』の期間は、その四倍に及ぶ年数です。そしてその威音王仏は、衆生に大きな利益(りやく)を与えて、そののち滅度されたのでした」

【三―九頁 四行】「その『正法』と『像法』の時代が終わって、仏法が全く見失われようとする時代が来ると、再び仏が現われましたが、その仏のお名前は同じく威音王如来と呼ばれました。そうしたことがその後、二万億の仏が代々にわたって出現して繰り返されましたが、しかしそれらの仏の名はすべて最初と同じく威音王如来と呼ばれていました」

【過去世の威音王(いおんのう)如来の時代、常不軽という菩薩がいた】——

【三―九頁 七行】「じつはその初代の威音王如来が滅度されたあと正法が滅して、教えが形だけしか伝わっていない『像法(そうぼう)』の時代で、かつ、法が忘れ去られようとする時、一人の出家菩薩がいました。【(偈)三二三頁 七行/青經典二三頁 一行】『是(こ)佛の滅後法盡(ほうつ)きなんと欲せし時一(ひと)りの菩薩あり』、名を『常不軽(じょうふきょう)』と言いました。

【(偈)三二三頁 八行/青經典二三頁 二行】『時に諸(もろもろ)の四衆(しじゆ)法に計著(けいちやく)せり』そのころの出家・在家の修行者たちは、教えを自分の都合に合わせて自分勝手に解釈し、それにとらわれていました。そして自分は真の悟りを得ていないのに、悟ったかのように思い込んでいる憍慢(きょうまん)な者たちが世の中にはびこっていました」

【常不軽菩薩の信仰姿勢 — 『但行礼拝・たんぎょうらいはい』】——

【三―九頁 終四行】「得大勢菩薩よ。なぜ『常不軽』と名付けられたかと言いますと。この比丘は、相手が出家、在家を問わず、とにかく仏道修行をしている男女を目にすると、礼拝

讚歎して『私はあなたを軽んじません（軽蔑したり、侮辱や批判もしません）。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となれるお方ですから…』と手を合わせ拜むのでした。しかもこの菩薩比丘は、／（『専（もっぱ）らに經典を讀誦せずして、但禮拜（ただらいはい）を行ず』）經典を讀誦することもなく、以上のような禮拜行をただひたすらに行うばかりでした。「しかもはるか離れた場所にいるのを見つくと、わざわざそばにやって来て、同様に『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となれるお方ですから…』と讚歎するのでした」**【但行禮拜・たんぎょうらいはい】**

【三二〇頁 三行】「ところがその男女の出家・在家の修行者の中には、心が歪（ゆが）んで曲がり、濁（にご）っている者もいて、常不輕菩薩のそのような禮拜行に腹を立て、『このバカ野郎。お前は一体どこからやって来た奴だ。オレ達を軽んじないなどと善人ぶったことを言いやがって、一体、何様のつもりだ。どこの馬の骨とも解らぬお前が、オレ達に『仏に成れる』のだとよく言うものだ。オレ達を馬鹿にするのか！ 口から出まかせの授記を言いやがって、偉そうなことを言うな！』と、常不輕菩薩に対して口を極めて罵（ののし）るのでした。しかし、常不輕菩薩はその言葉を大きく包み込んで受け止め、怒り返すようなことはしませんでした【(偈)三二三頁 終二行／青經典二三頁 終三行】（『不輕菩薩 能（よ）く之（これ）を忍受（にんじゅ）しき』）」

【三二〇頁 六行】「こうして長い年月、常不輕菩薩は罵（ののし）られ通してでしたが、しかし、常不輕菩薩は最後まで怒り返すことはせず、そればかりか相変わらず人さえ見れば『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となれるお方ですから…』と讚嘆し続けるのでした」

【三二〇頁 終四行】「常不輕菩薩の言葉の真意を理解できない者たちは、腹を立て、怒り、杖（つえ）や棒で殴（なぐ）りかかり、石や瓦（かわら）を投げつけたりしました。するとこの菩薩比丘は、／（『避け走り遠く住して、猶（な）お高聲（こうしょう）に唱えて言わく』）すーっと逃げて遠くへ行き、遠く離れた場所で大きな声で『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となれるお方ですから…』と言うのでした。このようなことをいつまでも繰り返していらしたので、これら増上慢の男女の出家・在家の修行者たちは、この菩薩比丘を『常不輕』と名付けたのでした」

【『但行禮拜・たんぎょうらいはい』による功德】（『仏性禮拜』の功德とは）——

【三二〇頁 終二行】「そういうただ一つの『仏性禮拜』の行だけを一生実践し続けたことにより、／【(偈)三二三頁 終二行／青經典二三頁 終三行】（『其（そ）の罪畢（つみお）え已（おわ）って』）**①**常不輕菩薩がかつて前世に於いて犯した悪業（宿業）を滅することができました、**②**そして菩薩比丘が寿命を終えようとする今際（いまわ）の際（きわ）で、さきに威音王（いおんのう）仏が説かれた法華經の真理に基づく二十千万億という無数の教えを、あたかも空中から響きわたる声を聞くように『自得』したのでありました。そしてその教えを受持したことによって

③眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清浄になったのでした。こうして六根が清まったために④大きな神通力を得ることができ、寿命の増益を得て、那由他歳(なゆたさい)という計り知れない期間延びました。そして、【(偈)三二四頁 一行/青經典二四頁 一行】(『廣(ひろ)く是(こ)の經を説く』) 常不輕菩薩は⑤広く人々のために法華經を説いたのでした」

【常不輕菩薩を罵っていた者たちが改心。常不輕菩薩を讚歎する】——

【三二頁 三行】「すると、悟ってもいないのに悟っているかのように傲慢(ごうまん)な心を持っていた増上慢の出家・在家の男女の修行者たちや、常不輕菩薩を輕蔑して『常不輕』とあだ名を付けた者たちは、／(『其(そ)の大神通力・樂説辯力(ぎょうせつべんりき)・大善寂力(だいぜんじゃくりき)を得たるを見』) 常不輕菩薩が大神通力を得、しかも法を説き、どのような人にも心から納得させ《樂説弁力・ぎょうせつべんりき》、どんな圧力を受けても変わらず善行を修することができる《大善寂力・だいぜんじゃくりき》という姿を目(ま)の当たりにして、常不輕菩薩から教えを聞こうという心に徐々に変わって行きました。／(『其(そ)の所説(しょせつ)を聞いて、皆信伏(しんぷく) 隨從(ずいじゅう)す』) そしてひと度、教えを聞くと、教えを深く信じ、傾倒(けいとう)し、従うようになりました。【(偈)三二四頁 一行/青經典二四頁 二行】(『諸(もろもろ)の著法(じゃくほう)の衆皆菩薩の教化し成就して佛道に住せしむることを蒙(こうむ)る』) また、低い教えにとどまり執着していた人々は、常不輕菩薩のおかげで、結果的には人格を高めて行くことができ、そして仏の悟りを志すようになりました。

【常不輕菩薩は『法華經』を説き続けた】——

【三二頁 六行】(『是(こ)の菩薩復(また)千萬億の衆(しゅ)を化(け)して、阿耨多羅三藐三菩提(あのだらさんみゃくさんぼだい)に住せしむ』) 「さらに常不輕菩薩は、再び千万億という無数の人々を教化して、それらの人々が『仏の悟りを願う心』を不動のものとするまでに導いたのでした。そしてついに常不輕菩薩は寿命を尽き、亡くなったのでした」

【三二頁 七行】「常不輕菩薩はその功德によって、／(『命終(みょうじゅう)の後(のち)、二千億の佛に値(あ)いたてまつることを得(う)』) 亡くなったのち、さらに二千億という無数の仏に次々と出会うことができました。そして／(『其(そ)の法の中に於て是(こ)の法華經を説く』) その仏はみな『日月燈明(にちがつとうみょう)仏』という同じお名前でした。それらの仏のみもとで常不輕菩薩は法華經を学び、多くの人々を教化し、法華經を説き広めたのでした。その功德によってさらに二千億の仏に会いたてまつることができたのでした。そうして出会えた二千億の仏はみな『雲自在燈王(うんじざいとうおう)仏』という同じお名前でした」
【三二頁 終四行】「常不輕菩薩はこれら二千億の『雲自在燈王(うんじざいとうおう)仏』のみもとで法華經を受持し、読誦して、／(『諸(もろもろ)の四衆(ししゅう)の爲(ため)に此の經典を説くが故に』) 多くの出家・在家の男女の修行者に法華經を説き、そしてその功德によって眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清浄になったのでありました。その結果、／(『四衆(ししゅう)の中に於て

法を説くに、心畏(こころおそ)るる所なかりき』) 人々に畏(おそ)れ憚(はばか)ることなく法を説くことができるようになったのでした」

【三二頁 終行】「**得大勢**(とくだいせい)よ。この**常不輕菩薩**はこのように無数の仏を供養・恭敬(くぎょう)・尊重(そんじゅう)・讚歎(さんだん)して、そして様々な善行を行ないました。そうして自身の人格向上をつとめ、そののちまた、千万億という仏に会いたてまつり、それぞれの仏から法華經を聞くことができたのです。／(『功德成就して當(まさ)に作佛することを得たり』)【(偈)三二四頁 三行/青經典二四頁 四行】(『是(こ)の經を説くが故に無量の福を得漸(よ)く功德を具(ぐ)して疾(と)く佛道を成す』) さらに法を説き続け、こうした計り知れない功德を積み重ねていくことによって、ついに仏の悟りを得ることができたのでした」

【重大宣言！ 常不輕菩薩は私(釈尊)の前身】

『歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう』の大切/永遠の寿命なるがゆえの修行)——

【三二頁 三行】「**得大勢**よ。どのように思いますか。このように生まれ変わり死に変わりして、数々の仏に仕え修行精進した**常不輕菩薩**は、ほかの誰でもありません。この私だったのです。もし私が前の世において法華經を受持することなく、読誦もせず、人に説くことがなければ、仏の悟りを得ることはできなかつたでしょう。このように過去において数々の仏のみもとにおいて法華經を受持し、読誦し、／(『人の爲に説きしが故に、疾(と)く阿耨多羅三藐三菩提(あのかたらさんみゃくさんぼだい)を得たり』) 人のために法を説いたからこそ、まわり道をすることなく真っ直ぐに仏の悟りへ達することができたのです」

—— 【歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう】

【法華經を實踐する者(仏性礼拝をする者)を罵る罪と、仏性礼拝による救い】

『千劫の長きにわたり仏法僧に出会えず、その結果、怒りと苦しみの地獄の世界に住す』——

【三二頁 七行】／(『瞋恚(しんに)の意(こころ)を以て我を輕賤(きょうせん)せしが故に、二百億劫常に佛に値(あ)わず、法を聞かず、僧を見ず』)「**得大勢**よ。その時の増上慢の出家・在家の修行者たちは『怒り』の心をもって私を輕んじ、罵(ののし)り、賤(いや)しめたために、その悪業によって二百億劫という計り知れない長い期間、仏《仏》に会うこともできず、仏の教え《法》も聞くことができず、仏の教えを信じ行ずる人たちの仲間《僧》に入ることもできませんでした。／(『千劫阿鼻地獄(あびじごく)に於て大苦惱(だいくのう)を受く』) ですから千劫の長きにわたって人生を苦しみ、怒り・貪り・争う地獄のような日々を送るのでした。しかし、その罪がようやく消えて、先の悪業が滅尽(めつじん)した時、人々を仏の悟りへと導こうと教化している**常不輕菩薩**に巡り会うことができたのです。【(偈)三二四頁 五行/青經典二四頁 終二行】(『著法(じゃくほう)の者の不輕の汝當(なんじまさ)に作佛すべしというを聞きしは是(こ)の因縁を以て無数の佛に値(あ)いたてまつる』) そしてこの者たちは、小法(しょうぼう・低い教え)にとらわれていたのですが、**常不輕菩薩**から『あなたは、必ず仏に成れる方です』と礼拝され、そのおかげでその後、無数の仏に出会うことができた

のでありました」

【重大宣言！ 常不輕菩薩を罵った者は、実は今、法華經を聴く者の一部】——

【(偈)三二二頁 終三行]「得大勢よ。あなたはどのように思いますか。その時の常不輕菩薩を軽んじ、賤(いや)しめた増上慢の出家・在家の修行者たちは、ほかでもありません。私たちなのです。今、この説法会にいる跋陀婆羅(ばだばら)ら500人の菩薩であり、師子月(ししがつ)ら500人の比丘(男性の出家修行者)であり、尼思仏(にしぶつ)ら500人の優婆塞(うばそく・男性の在家修行者)たちなのです。しかしこの者たちは今では、仏の悟りを求める志が定まり、決して退転することがない素晴らしい求道(くどう)者になったのです」

【法華經を實踐する者は、生まれ変わっても法華經に遭いたてまつる】——

【(偈)三二四頁 七行 / 青經典二五頁 三行] (『我前世に於て～ 斯(こ)の經の第一の法を聽受(ちようじゆ)せしめ』)「私は前世において、これらの人々に仏法の中で最高の法である法華經を説き聞かせ、しっかりと教えを受け止めるように教化してきました。【(偈)三二四頁 八行 / 青經典二五頁 四行] (『開示して人を教えて 涅槃に住せしめ』) さらに自らの仏性を開かせ、真理を示して、何事にもとらわれることのない大安心の境地へと導いてきました。【(偈)三二四頁 終四行 / 青經典二五頁 終三行] (『世世(せせ)に是(かく)の如き經典を受持しき』) そして私も生まれかわるごとに、常にこの法華經を受持して来たのでした」

【(偈)三二四頁 終四行 / 青經典二五頁 終三行] (『億億萬劫より 不可議に至って 時に乃(いま)し是(こ)の法華經を聞くことを得(い)』)「億億萬劫という、とても考え及ばない年月が経ち、時が熟してこそはじめて、法華經を聞くことができるのです。【(偈)三二四頁 終三行 / 青經典二五頁 終行] (『億億萬劫より 不可議に至って 諸佛世尊 時に是(こ)の經を説きたもう』) そして同様に億億萬劫という計り知れない年月を経て、仏ははじめて法華經を説くのです」

【仏の滅度、法華經を迷わず實踐すること(五種法師の行の實踐)の大切さ】——

【三二三頁 一行]「得大勢よ。今こそしっかりと悟らなければなりません。この法華經は、諸々の菩薩たちに大きな功德を与え、仏の悟りへと導く尊い教えです。 / (『如來の滅後に於て、常に是(こ)の經を受持し誦誦し解説(げせつ)し書寫(しょしゃ)すべし』) ですから、私が入滅したのは、常にこの教えを受持し、誦誦し、人のために説くという『五種法師の行』に励まなければならないのです」

【(偈)三二四頁 終二行 / 青經典二六頁 一行]「この法華經に巡り会うことは、本当に極めて稀(まれ)なことです。ですから世の修行者たちよ。私が滅度したのは、この尊い法華經を聞いてゆめゆめ疑いや迷いを持ってはなりません。『この教えは果たして真実だろうか? 【(偈)三二四頁 終行 / 青經典二六頁 二行] (『是(かく)の如き經を聞いて 疑惑を生ずることなかれ』) この教えを素直に受け止めることができない』。などというような疑惑の心を持ってはなりません。」

【(偈)三二四頁 終行/青經典二六頁 三行]/ 『應當(まさ)に一心に 廣くこの經を説くべし 世世(せせ)に 佛に値(あ)いたてまつりて 疾(と)く佛道を成(じょう)ぜん』 一心にこの法華經を広めなければならぬのです。そうすれば、その功德によって生まれ変わるごとに仏に会いたてまつることができて、まわり道をすることなく真っ直ぐに仏の悟りを得ることができるようになります」

釈尊は仏の滅後における弟子たちの大切な心構えを説かれたのでした。



おし けっしょう ぎょうぼう かんそか 教えの結晶と行法の簡素化

(P20・8行/P12・終4行)

眞実を日常の生活に実践するのに、誰にでも「簡単にできる行法」とはどんなものでしょうか。「自分の仏性を見詰め、人の仏性を拝むこと」がそれです。

自分の仏性を見詰めることを怠らなければ、たとえ煩惱はそのまま放置しておいても、煩惱そのものがひとりで「善のエネルギー」へ変わってしまうのです。

《息惺のひととき ①》

眞実を日常生活に実践するのに、簡単にできる行法が「自分の仏性を見詰め」「人の仏性を拝むこと」と庭野開祖は説きます。

— では、「自分の仏性を見つめる」と共に、私の日常生活で、まず「誰」の「仏性を拝むこと」が大切だと思いますか？ それは「誰」なのか考えてみましょう。

《息惺のひととき ②》

「自分の仏性を見詰めることを怠らなければ、たとえ煩惱はそのまま『放置』していても、煩惱はひとりで『善のエネルギー』に変わる」と庭野開祖は説きます。

— この「自分の仏性を見詰め」て、「煩惱を放置」するとは、どのような意味？

ぶっしょう いとぐち 仏性のめざめの糸口

(P23・4行/P14・9行)

自分の「本質の善」を指摘してくれて、それに「正しい尊敬」をはらってくれたならば、誰でも自分をなおす気になりましょう。一時は、オベンチャラを言うなどと誤解することもありましょうが、心の底では決して悪い気はしません。それが自然な心情です。いつしか「オレもまんざらではないな」という気持ちになってくるものです。これが仏性のめざめの糸口になるのです。

《愚惟のひととき ③》

庭野開祖は「相手の『本質の善』を指摘し、『尊敬を払う』ならば、一時は、オベンチャラと誤解されても良い。いつしか『俺もまんざらではないな』という気持ちになってくれれば、それが『仏性のめざめの糸口』になる」と説きます。

— この、相手が「俺もまんざらではないな」という気持ちになることについて、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

『法華經^{ほけきょう}を持たん者^{たもの}を、若し悪口^{あつく}・罵詈^{めり}・誹謗^{ひぼう}することあらば、大いなる罪報^{ざいほう}を獲^{おほ}(えん)』 (三一八頁 二行)

『諸^{もろもろ}の菩薩^{ぼさつ}の爲^{ため}に～應^{おう}ぜる六波羅蜜^{ろくはらみつ}の法^{ほう}を説^といて』 (三一八頁 終行)

なぜ菩薩^{ぼさつ}には六波羅蜜^{ろくはらみつ}

(P39・終5行/P26・終4行)

菩薩にとって一番大切なのは、いうまでもなく「愛他・利他の精神」であり、その精神から発した実践行動～「布施」であります。

～ただ一つ、「布施」という徳目だけが、菩薩修行の「六波羅蜜」に限ってあり、しかも、一番真っ先におかれていることに、大きな特色があるわけです。(P41・7行/P28・1行)

※ (秀島の領解) 「持戒」≡ (正命) / 「忍辱」≡ (正念・正定) / 「精進」≡ (正精進・正行) /

「禪定」≡ (正定) / 「智慧」≡ (正見・正思惟) 《布施》のみが「愛他・利他」の実践、他は「自利」

仏性^{ぶつしょうらいはい}礼拝^{らいはい}はすべてに先行^{せんこう}すべきもの

(P51・終3行/P36・5行)

『専^{もっぱ}らに經典^{きょうでん}を讀誦^{どくじゆ}せずして、但^{ただ}禮拜^{らいはい}を行^{ぎょう}ず』 (三二〇頁 一行)

【但行^{だんぎょう}礼拝^{らいはい}・たんぎょうらいはい】—

だからといって、読誦や説法が仏道修行にとって不要だと誤解してはいけません。これは、「人の**仏性を礼拝することが仏道修行の根本**であり、**全てに先行するもの**だ」という意味です。

『避^さけ走^{はし}り遠^{とお}く住^{じゆう}して、猶^なお高聲^{こうしやう}に唱^{とな}えて言^いわく』 (三二〇頁 終四行)

『^{ぶっしょうらいはい}仏性礼拝』^{じょうふきょうぼさつ}行の常不^{しょうじん}軽^{なが}菩薩の精進の流れ (P62・4行/P44・終3行)

- ① **仏性を確信** — あらゆる人間が仏性を持っていることを確信。
↓
これをすべての考え方と行動の基礎とした。
- ② **仏性を礼拝** — 仏性の確信を、行動の上に明らかにした。礼拝行に徹する。
↓
- ③ **仏性の自覚へ導く** — 『仏性礼拝』の実践によって、全ての人を、己の仏性に目覚めさせようと努力した。
↓
- ④ **一行に努力を集中** — 『仏性礼拝』というただ一つの行いに努力を集中。
↓
- ⑤ **忍辱と柔軟** — どんな迫害にあっても耐え忍び、柔軟な態度で粘り強く所信を貫く。
↓
- ⑥ **真理を自得** — 無私の行いと仏性礼拝を積み重ねた結果、真理を悟得(自得)。
↓
(六根が浄まり、寿命増益) — 『仏性礼拝』の実践で六根が浄まり、寿命が延びた。
↓
(法華経を説き広める) — 『廣く人の爲に是の法華経を説かん』。

《^{おん}息^い惟のひととき ④》

庭野開祖は、常不軽菩薩が六根を清浄にし、法華経を広く説くに至るまでにたどった5つの手順の第一段階に、「仏性を確信」したことだと解説しています。
— このこと(あらゆる人間が「仏性を確信」することが第一としたこと)を、あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

^{ぶっしょう}仏性とほなにか (P63・終4行/P45・終3行)

第一は、— 「仏の本性」という方向から見た場合。

不生不滅の「真如」そのものであり、あらゆるものを生かしてくださっている「久遠本仏」そのものを示します。

第二は、— 「仏に成りうる可能性」という方向から見た場合。

「至上の真理を悟った完全な人間になりうる可能性」。すなわち「仏に成り得る可能性」

^{じひ}慈悲とは (P68・3行/P48・終3行)

寛容の心をもって人に対すれば、その人の「可能性を伸ばしてあげたい」という気持ちが、ひとりだけで生じてきます。そんな気持ちを「慈悲」というのです。

仏教で、対人関係における最大の美德としている「寛容」も「慈悲」も、つまりは「人の仏性を認める」ことによって湧いてくるものであることを知らなければなりません。

《^{しづい}息性のひととき ⑤》

「寛容の心をもって人に対すれば、その人の『可能性を伸ばしてあげたい』という気持ち、ひとりでに生じてきます。『人の仏性を認める』ことによって、『慈悲』というものが生じます」と庭野開祖は説きます。— では、この『相手の可能性を伸ばしてあげよう』、『相手の仏性を認めよう』という考えを、私は常に持っているか？振り返ってみましょう。

さんいんぶっしょう 三因仏性

(P69・終5行/P49・終6行)

仏性には三因があると説かれています。すなわち「正因」と「了因」と「縁因」です。

「正因仏性・しょういんぶっしょう」— 全ての人が本来そなえている仏性。人間は本仏と一体。

「了因仏性・りょういんぶっしょう」— 教えを学び、法に照らし合わせることによって、本来そなえている仏性を知る智慧。

「縁因仏性・えんいんぶっしょう」— 「了因」を育て、「正因」を開発せしめる縁となるような「善行の功德」。つまり自行化他の行。常不軽菩薩の「礼拝行」など。

※ 『自らの仏性を悟り』⇒『他のすべての仏性を拝み』⇒『他者が仏性を自覚し、自他の仏性が輝く』
(「正因仏性」) (「了因仏性・縁因仏性」) (「仏性開顕を果たす。実現」)

じゅんけ ぎやくけ 順化と逆化 《「仏性」を自覚させる二つの道》

(P72・1行/P51・5行)

「順化・じゅんけ」— 仏性というものは常に外へ向かって顕現しようとする性質を持っています。その性質を利用して、その力にはずみを与え、引き出してあげる教化法。

「逆化・ぎやくけ」— 仏性の周りに取り巻いている「迷いの壁」があまりにも厚く、堅いので、やむをえず反省をうながす強い言葉や、厳しい破折によって、外部からその厚い堅い壁を打ちたたかす教化法。

『人の爲に説きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり』 (三二二頁 六行)

ひとつの行でも根気よく

(P81・終行/P58・1行)

常不軽菩薩が、ついに人々の教化に成功したのも・・・

① 「正しいと思うひとつのことを」⇒ (正しいことを)

② 「まごころをこめて」⇒ (真心こめて)

③ 「どのような事態が起こっても、くじけずに根気よくやり通す」⇒ (繰り返す)

という三つの要因がそろっていたからにはほかならないのです。

※「正しいことを」、「真心こめて」、「繰り返す」。

《^{しづい}息惟のひととき ⑥》

「『正しいことを』、『真心こめて』、『繰り返す』ことが、常不軽菩薩を模範とする信仰姿勢だ」と庭野開祖は説きます。— では、私の信仰姿勢は如何でしょう？
何か、「真心こめて、繰り返していること」はありますか？
振り返ってみましょう。

寂光土とは

(P95・7行/P67・5行)

寂光土の「寂(じゃく)」とは、「不変不動の安らかさ」という意味なのです。～ 常に変わりがなく光明に満ち溢(あふ)れた世界を寂光土というのです。～ 万物を生かし、暖め、カづける、輝かしい光明がさんさんとふりそそぎ、～ お互いに美しく照らし合いながらはたらいているという「生々澆漑(せいせいほつたつ)」たる世界なのです。

自行と化他の循環が成仏の因

(P103・3行/P73・6行)

常不軽菩薩は自行と化他行を替わりばんこに、数えきれないほど繰り返して行ったのです。その数限りがない功德の積み重ねによって、ついに仏になったのです。～

すなわち、学んでは行ない、行なっては学び、その受動・能動の両面から得るものを一つひとつ積み重ねつつ、確実に成道への道をたどって行ったのです。～

はじめはただ一つの菩薩行から入って行っても良い。それをまごころから行じ、繰り返す。そして自分が得た法を自分のものだけにせず、かならず人に法を説いて行く。～

この自行と化他行の循環によってしだいに悟りを深め、ついに仏の境地に達したというきわめて現実的な経過を、我々に示しています。常不軽菩薩は、我々にとって他には得られぬ貴重なお手本なのです。

《^{しづい}息惟のひととき ⑦》

「常不軽菩薩の行は、他には得られぬ『貴重なお手本』です」と庭野開祖は説きます。

① 「ただ一つの菩薩行で良いので、その行から入って行き、繰り返す」

② 「(自分が学び気付いたこと)を必ず人に説いて行く」

③ 「そのような自行と化他行を替わりばんこに繰り返す(循環)」

という常不軽菩薩の修行姿勢を見て

— 自分自身の信仰姿勢を振り返ってみましょう。

歴劫修行

(P107・終5行/P76・終4行)

この常不軽菩薩のように、ただ一生だけの修行ではなく、死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わりし、幾度もの人生を歴(へ)ながら、真の悟りを得るために修行を続けていくことを意味します。(※自らのいのちが無限・久遠であるからこそその修行)

仏に値わず法を聞かず僧を見ず

(P109・1行/P78・1行)

『瞋恚(しんに)の意(こころ)を以て我を軽賤(きょうせん)せしが故に、二百億劫常に佛に値(あ)わ
ず、法を聞かず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄(あびじごく)に於て大苦惱を受く』(三二二頁 七行)

仏教に説くところの「罰(ばつ)」というものの真の姿が、ここに明らかに示されています。～とりもなおさず増上慢(そうじょうまん)の人たちは、自分が心の目を閉ざして仏を見ず、自ら耳をふさいで法を聞かず、自我の殻に閉じこもって仏法信者に近づいて行こうとしなかった・・・ということにほかなりません。～

そのために、内から湧いてくる煩惱を、教えや悟りによって浄めることもできず、また外からやって来る害悪に向かつては、ただ修羅の闘争を繰り返すばかりで、常に阿鼻地獄(あびじごく)のような人生苦を舐(な)め続けなければならなかったのです。

これが、「罰」というものの原理です。

《息性のひととき ⑦》

常不軽菩薩品では、増上慢の人たちは長年にわたって「仏を見ず、法を聞かず、僧に近づかない」ということが説かれています。これは心が素直でなく、自分が正しいと心が頑(かたく)なになり、自分中心の心でいるからとされます。
— では、私は「仏を見ようとせず、法を聞こうとせず、僧に近づこうとしない」ということはなかったか？ また、その時の自分の心・精神状態はどのような時であったか？ 振り返ってみましょう。

三宝

(P114・1行/P81・5行)

深淺(しんせん) 三つの意義があるとされる仏・法・僧について

「住持三宝・じゅうじさんぼう」— 現実に即した、現象上の三宝。目に見える仏、仏像など(仏)、
経典(法)、僧侶、法の実践者(僧)。

「別相三宝・べっそうさんぼう」— 歴史的に見た場合の仏法僧。人間釈尊(仏)、釈尊の説法
(法)、釈尊教団の僧(僧)のように、本来一体であった三宝が特別な相(すがた)で現れたもの。

「一体三宝・いったいさんぼう」— 一番深い意味の三宝。久遠実成の仏、真如(仏)、真如そのもの、根源の法(法)、真如を具現した和合の姿(僧)。本質的な「仏法僧」で、もはや「仏法僧」が一体となっているために、「一体三宝」というのです。

逆縁というものも大切であることを、暗にお説きになっておられるのです。～

敵対したり、攻撃したりするのは、とにもかくにも関心を持っているからこそするのです。たとえマイナスの関心であろうとも、関心を持っていることは、幸いとしなければなりません。なぜならば、それが説得の手がかりとなるからです。～

逆縁の人を決定的な敵とすることなく、その一段上に立って大きく包容し、いつかは自分の陣営に引き入れるという、度量と根気よさが、どんな場合でも必要でありましょう。それが仏教精神というものであり、常不軽菩薩がそのいいお手本であるわけです。

『是の法華經は大に諸の菩薩摩訶薩を饒益して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ～ 如來の滅後に於て、常に是の經を受持し誦誦し解説し書写すべし』 (三二三頁 二行)

すべての人間の仏性を礼拝し、顕現させるという根本精神を叩き込んだうえで、その精神に基づいて「五種法師」を行じなければならぬことを教えられたものです。

『開示して人を教えて涅槃に住せしめ』 (三二四頁 八行)

《愚惟のふいかえり まとめ》

今日の『常不軽菩薩品第二十』の学びを通して、何を学び取ったか？（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）かみ締めてみましょう。

合 掌